

## 『読売新聞』にみる太陽族と補導

### —青少年の管理とセクシュアリティ—

大阪大学 中山良子

#### 1 目的

戦後日本においては「性的言説の生産」を政府の部局が担っていたとされる（赤川学 1999）。しかし、政府の部局による「性的言説の生産」は、先行研究で取り上げられた文部省社会教育局や厚生省、労働省以外においてもなされている。また、「新中間層のイデオロギー」である純潔規範が「大衆化」していったという点に関しても、歴史的・社会的に再度検討されるべきであろう。

本報告では、戦後青少年と呼ばれた人のセクシュアリティの社会問題化に着目し、純潔規範を自明とする論調が構築される過程と、純潔規範の対象の広がりとを、マスメディアが果たした役割を踏まえながら、明らかにすることを目的とする。

#### 2 方法

『読売新聞』を用いて、1956年に生じた太陽族の社会問題化に着目し、その背景にある警察による補導の動向を検討する。小説・映画『太陽の季節』・太陽族・補導に言及する記事において、青少年のセクシュアリティがいかなる形で言及されていたのか、分析を行う。次いで、警視庁発行の『自警』、警察大学校発行の『警察学論集』、『警察研究』、『警察公論』、中央青少年問題協議会発行の『青少年問題』などから、補導の運用の変遷を明らかにする。また、『読売新聞』、『青少年問題』から、青少年の管理に動員された対象を明確にする。

#### 3 結果

『読売新聞』では、まず小説・映画『太陽の季節』に描かれたセクシュアリティを問題視した記事が掲載された。1956年7月以降は、被補導者の「桃色遊戯」「暴力行為」が繰り返し記事になり、同紙は被補導者を太陽族と名付け、管理の行き届かない青少年の典型例として社会問題化していった。そもそも警察は、1954年の新警察法の施行以降、未成年者に対する補導を「犯罪の予防活動の一環」として推し進めていた。1955年9月には「犯罪の予防及び犯罪者の処遇に関する国際連合第一回国際会議」においても、犯罪未満である非行対策の重視が提言された。警察は「警察の少年非行防止」において「国民大多数が国家公共の権限に対する考え方」を変えることを望んでいた。『読売新聞』での太陽族の報道は、警察の意向を体現し、世論調査を駆使し、「現在の警察の取締の不徹底」を問い、青少年の管理を推進する論を組み立てた。太陽族の「桃色遊戯」を社会問題化し、太陽族映画の上映反対運動を肯定することは、「純潔規範」から逸脱する青少年を問題化することでもあり、このような論調をもって、『読売新聞』は警察による青少年の管理の推進を肯定する主張を展開した。また、同紙における、青少年の純潔規範からの逸脱という問題の焦点化は、婦人団体やPTAが青少年問題に関与することの正当性を担保した。

#### 4 結論

1950年代中盤の『読売新聞』において純潔規範は、警察に目論まれた補導・青少年の管理を推進するための論拠として用いられた。太陽族の社会問題化という出来事を介し、「新中間層のイデオロギー」であった純潔規範は、階層横断的な枠組みである青少年のあるべきセクシュアリティとして、マスメディアに語られるようになった。

#### 文献

赤川学 1999 『セクシュアリティの歴史社会学』 勁草書房